

主師親御書（春季彼岸会の砌）

釈迦仏は我等が為には主なり、師なり、親なり。一人してすくひ護ると説き給へり。阿弥陀仏は我等が為には主ならず、親ならず、師ならず。然れば天台大師是を釈して曰く「西方は仏別にして縁異なり、仏別なるが故に隠顕の義成ぜず、縁異なるが故に子父の義成ぜず。又此の経の首末に全く此の旨無し、眼を閉じて穿鑿す」と。実なるかな、釈迦仏は中天竺の浄飯大王の太子として、十九の御年家を出で給ひて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峰に登りては妻木をとり、深谷に下りては水を結び、難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ給ひて一代聖教を説き給ひしに、上べには華嚴・阿含・方等・般若等の種々の経々を説かせ給へども、内心には法華経を説かばやとおぼしめされしかども、衆生の機根まちまちにして一種ならざる間、仏の御心をば説き給はで、人の心に随ひ万の経を説き給へり。此くの如く四十二年が程は心苦しく思し食ししかども、今法華経に至りて「我が願既に満足しぬ、我が如くに衆生を仏になさん」と説き給へり。久遠より已来、或は鹿となり、或は熊となり、或る時は鬼神の為に食はれ給へり。此くの如き功德をば法華経を信じたらん衆生は是真仏子とて、是実の我が子なり、此の功德を此の人に与へんと説き給へり。是程に思し食したる親の釈迦仏をば、ないがしろに思ひなして「唯以一大事」と説き給へる法華経を信ぜざらん人は争でか仏になるべきや。能く能く心を留めて案ずべし。二の巻に云はく「若人不信毀謗此経、則断一切世間仏種、乃至不受余経一偈」と。文の心は、仏にならん為には唯法華経を受持せん事を願ひて、余経の一偈一句をも受けざれと。

（四七頁）

本日は春季彼岸会に当りまして只今は皆様方と共に読経唱題申し上げ、御報恩申し上げた次第であります。先祖の方々も皆様方の真心からの御回向を頂戴いたされまして、さぞかし満足御嘉納の事と拝察いたします。

ただ今拝読の御書は主師親御書の一節であります。この主師親御書は「建長七年」と有りますから、大聖人様が御年三十四歳の時に認められた御書であります。それ故、まだ竜の口法難を過ぎておりませんのでお釈迦様を中心にしてお書きになっている御書であります。この当時、即ち鎌倉時代は非常に念仏信仰が盛んな時代でありました。そして真言宗あるいは禅宗等と共に日本国中を風靡しておりました。とくに立正安国論は此等の宗をすべて破折されるのでありますが、特に念仏の害毒について強く破折されているのです。ですから、この主師親御書は立正安国論より以前に認められております。当時、多くの人々が信仰をしていた阿弥陀仏を中心に破折されているのです。それ故内容は、阿弥陀仏と相対しつつ、我等衆生のためには釈迦仏（釈尊）一人が主師親の三徳具備された仏であり、また一代聖教のなかでは法華経が最第一であることを述べられており、特に、末法においては法華経を持ち、南無妙法蓮華経と唱えることが即身成仏の直道であり、それ以外は夢のなかの栄華、幻の楽しみであると申されているのであります。

更に又、法華經を淨らかな心で信敬するものは地獄・餓鬼・畜生の三惡道に墮ちないと
の法華經提婆達多品第十二の經文を示され、「此の品は二つの大事あり」と申されて、「提
婆達多の惡人成仏」と、「童女の即身成仏（女人成仏）」について述べられているのであり
ます。そして更に続いて、三惡道の大苦の内容を示され、妙法を信じ、行ずることが三
惡道を免れる唯一の方途であることをお示しになり、とくに「法華經は女人を救うお經」
であることを申されて、本抄を結ばれているのです。

先ず、最初に『釈迦仏は我等が為には主なり師なり親なり』とありますのは法華經の
譬喻品第三の「今此の三界は、皆是れ我が有なり。其の中の衆生は、悉く是れ吾が子
なり。而も今此の処は、諸の患難多し。唯我れ一人のみ、能く救護を為す」の御文から
くるのであります。「三界」というのは、「欲界・色界・無色界」の三つの世界でありま
すが、この三界はみな仏の所有するところであり、仏のものであるというのであります。
仏のものといえますと、三界すべての国土が仏のものなのかという考え方がありますが、
ここでは思想界あるいは精神界を言われているのでありまして、けつして国土を所有す
る王様を支配すると云う意味ではありません。「此の三界」の「此の」とは娑婆世界の
ことでありまして、この娑婆世界は釈尊の教化の対象であり、心であるということです。
そして、この娑婆世界の衆生は皆釈尊の子供であると申されているのです。いま此の娑
婆世界はたくさん「難儀」が多いけれども、ただ釈尊一人のみが悟られて、その苦を
救うという意味から、仏教という主・師・親というのは釈尊一人であると申されている
のです。もちろん大聖人は、後にこれを転じて「日蓮が慈悲広大ならば」というところ
に、宗祖大聖人自らを主師親の三徳と顕されているのです。しかし、この主師親御書で
はまだ、そこまでは言っておられません。当時の阿弥陀仏あるいは大日如来等の諸仏
を中心に考えている諸宗を破折するために、釈尊を中心にしてお書きになられているの
です。

特に、大聖人ご在世当時の人々は盛んに阿弥陀仏が自分たちの主人であり、師匠であ
り、親であるという考え方が多かったのでありますから、阿弥陀仏はけつして、主人で
もなく、師匠でもなく、親でもないと言うことを申されているのです。そして、釈迦仏
こそ我ら娑婆世界の衆生のための、主であり、師であり、親であるから、ただ我一人が
一切衆生を救い護ると説かれたのであるから、阿弥陀仏を捨てて、釈迦仏を立てるべき
であると、申されているのであります。そのことについて、天台大師は法華文句の下
信解品第四の解釈の中に、「西方淨土はこの娑婆世界とは別の世界であつて我等娑婆世
界の衆生とは関係がないから阿弥陀仏とはまったく縁がないのである。即ち、この娑婆
世界の仏とは、釈尊であつて、阿弥陀仏ではないのである」と申されているのでありま
す。これは即ち、仏が別であるから、「隱顯の義」は成立しない、と申されているので
す。「隱顯の義」というのは、「衆生が仏から下種され結縁することを隠といい、その結
縁によって信心修行をして功德を顕現することを顯という」のであります。すなわち、

このように仏と衆生の結縁・化導を受けた関係を、「隠顕の義」というのです。それ故、隠顕の義によつて衆生を済度するということも、娑婆世界の衆生にとつては、釈迦一人のみである。なぜならば、娑婆世界と阿弥陀仏とは縁が異なるが故に、結局、子と親との義がない父子の義が成立しない。また「此の經の首末に全く此の旨無し、法華經の始めから終りまで阿弥陀仏が娑婆世界の教主であるとは、全くどこにも説かれていないから、眼を閉じて深く考えなさい」と天台大師は解釈されているのです。

昔のインドは「五天竺」といひまして、東・西・南・北・中の五つに分かれおりました。釈尊はその真中の中天竺の迦毘羅城という処で、淨飯王という国王の太子として生れられ、名を「悉達太子」といひましたが、御年十九歳の時に出家して家を出られ、檀特山という山に籠つて修行をされたのである、とあります。しかし、特別に山に籠つて修行されたのではなく、この十二年の修行のことを、普通、「難行六年、苦行六年」と申します、出家して十二年間、バラモンの師匠についていろいろと勉強をされ、あちらこちらを苦行し、遊行して歩いて勉強をされたのです。それを例えて「檀特山と申す山に籠らせ給ひ」と申されているのです。又、或時は高い山に登つて木を折つて薪とされ、或いは、谷に降りて水を汲んで生活をするという難行苦行をされたというのです。

そして御年三十の時に仏陀伽耶の菩提樹の下に於いて悟りを開いて仏になられ、表面的には華嚴經・阿含經・方等經・般若經等と、種々の一代の聖教を説かれたのでありますが、しかし、本心は法華經を説きたいと思われていたのです。ところが、はじめの内は衆生の機根がまちまちで一樣でなかつたので仏は本心を明かさなかつたのです。そして、衆生の機根を調えるために、人々の機根に従つて多くの經、即ち、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃という順序で説かれた。すなわち、これは化他のため、教化のため、やさしいことから順に説いて、最後にむずかしい法華經を説かれたのです。とにかく、この事に関して釈尊は四十二年の間は、心苦しく思つておられたのであります。

しかし今、法華經を説くに至つて、我が願いはもはや満足したと申され、そして自分と同じように全ての衆生を仏にしようと思われ、法華經を説かれたのです。また「久遠より已来」といふのは、即ち釈尊の菩薩の時の修行のことを指しているのです。即ちこれを、「本生譚」といいますが、仏が過去世において仏となるためにいろいろな修行をしたことを説かれているのです。また、この本生譚（釈迦がインドに生まれる前、ヒトや動物

として生を受けていた前世の物語であります）は大乗教においては必ず説かれています。例えば、釈尊は「鹿となり」、というのは鹿足王という王様になって自分の約束を満足に成し遂げた、というお話であり、あるいは「熊となり」（出典未詳）というのは、よく分かりませんが、そのような菩薩の修行をしたと、いうことであり、又、「或る時は鬼神の為に食はれ給へり」といふのは、雪山童子のお話であります。つまり、これは帝釈天が鬼神に化けて、雪山童子に向かつて過去仏の説いた「諸行無常・是生滅法（諸々の現象は、生と死を間段なく繰り返す生滅の法である。ゆえに森羅万象は無常であり、生死を流転するとい

う小乗教の低い生命観である」という小乗の半偈を説いたとあります。ところが、それを聞いた雪山童子は喜んで、残りの半偈を聞きたいと懇願して、自分の体を鬼神に食わせることを約束して、「生滅滅已・寂滅為楽（生滅とは、生より死までの人間の生涯をいい、滅已とは、煩惱を断ずることをいい、寂滅とは涅槃を意味し、為楽とは悟りをいう。即ち煩惱を断ずるところに悟りがあるとの意。）」の後の半偈を聞き終えて、巖の処々に半偈を書き残して、鬼神に身を投げたというお話がありますが、釈尊はこのように多くの功德を積まれたという本生譚を述べられています。その功德を、自分の子である「一切衆生」に、「法華經を信ずる人々」に与えると申されているのです。これほどに思つてくださる親の釈尊を当時の人々は蔑しろにして法華經の方便品で説かれた「唯以一大事因縁」という仏の大事な言を忘れて阿弥陀仏ばかりを拜んでいる人がどうして仏になることができません。しかるに末法においては、只南無妙法蓮華經と唱え、南無妙法蓮華經を信ずる人のみが、本当の利益を被り、仏になることができるのです。そのことを、良く自分の心にとどめて考えなさいと申されているのです。

法華經の譬喩品には「若し人が法華經を信じないで毀謗するならば、一切世間の仏になる種を絶つことになる」と説かれています。即ち、法華經を信じないで誹謗すると、何故に仏種を断ずることになるかというところ、法華經は一切衆生が仏に成るところの種である、それ故、一切衆生を成仏させるという根本の法華經を誹謗することは、せつかく法華經を信じようとしている人をして、信じさせないようにすることになり、結局その人を仏にさせないことになるので、仏になるところの仏種を断ずることになる。それ故、これほど悪いことではないのであるから、譬喩品に「其の人命終して阿鼻獄に入らん」と説かれているように阿鼻地獄に堕ちてしまうのです。又、同じく、譬喩品の最後の方に「但樂つて大乘經典を受持して 乃至余經の一偈をも受けざる有らん」と説かれているが、これは大乘の經典である法華經の一偈一句でも受け持ちなさいということです。それを大聖人様は、妙法蓮華經が法華經の心であるが故に、南無妙法蓮華經を持つ人こそ本当の成仏をする人であると仰せになつておられるのです。そのためには、阿彌陀經等の他のお經の一偈一句をも信ずることなく、すべての他のお經を捨てて、法華經を信心しなさい、仰せられているのです。とにかく私たちは、一心に御本尊に向かい奉つて南無妙法蓮華經とお題目を唱えることが、最も大事なことです。もちろん先祖の方々もこのお題目をもつて南無妙法蓮華經と我々がお唱えいたし御回向をすることによつて眞の成仏を得ることが出来るのです。私たちは、せつかくこの世に生れて来て、値いがたき大聖人の仏法に値い、大御本尊に値い奉つることができたのでありますから、なお一層信心に励んでいかなければなりません。それ故皆様方には更なるご精進をお願いいたします。本日のお話とさせて頂きます。 以上。